

豆腐の話



志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}

(相模女子大学名誉教授)

どうしても食べるのできない物がある。戦中・戦後の食糧事情を考えると、食べ物の好き嫌いなどとてもない話であるが、どうであれ受け付けることができない、食べたくない物がある。食べ物によってはアレルギー症状を起こす人もいる。

私が初めてパスタを食べたのは二十代半ばのこと。挽き肉が一杯入ったミートソースであった。無意識に、挽き肉を全て皿の端に寄せていた。そのとき挽き肉が苦手であることを知った。振り返ってみると、私は豚饅なるものは食べることができない。麻婆豆

腐も好きではない。ハンバーグも食べたいとは思わない。むろん、人間であるから、食べられないことはないと思うが、どうにも食指が動かない。

麻婆豆腐は食べないけれど、冷や奴、湯豆腐は大好きだ。京都へ行くとき、必ず一度は湯豆腐を食べる。昨年の十二月二十四日の日記を開いたら、このようなことを書いていた。

テレビに「クリスマスだ」と騒いで、楽しそうに歩いている若者の姿が映されているが、あつしには関わりのないこと。今晚、あぶったイカはなくてもいいが、冷

や奴と温めの粥があればいい。昔はやった歌を踏まえて、なんとも無頼な表現をしている。

ずっと昔のこと。春陽堂の和田欣之助(故人)に明治屋に連れていかれた。和田さんが「何がいいですか」と訊くので「豆腐」と答えた。隣にいた荒井邦男営業部長(当時。後に社長)が「社長、志村さんは豆腐が食べたいそうですよ」と意地悪く口添えをする。和田さんは困った顔をしながら「ここは豆腐はないのです」と言う。この店に豆腐がないことを承知しているのだが、根性のねじ曲った物言い

をしたことをふと思い出した。

ともあれ私の豆腐好きは仲間のあいだにかなり知られていた。鼎書房の加曾利達孝と神田の店に入ったとき、そこは豆腐など置いていない洋風の店であったのに、料理を注文するとき、加曾利が嘲笑うかのような顔つきで、「志村さんは豆腐か？」と言ったので、いささか腹が立った。

「麻婆豆腐を食べることができなくても、湯豆腐や冷や奴を馬鹿にしてはいけない。幕末の志士大村益次郎の豆腐好きは有名ではないか。そういえば、名古屋在住の知人が、大量の豆腐を送ってくれたことがあった。食べて食べて食べ続けたが、それでも飽きなかった。冷や奴はむろんのこと、湯豆腐にし、寄せ鍋にも豆腐を入れて食べ続けた。

ところで長谷健という作家がいた。『あさくさの子供』で第九回芥川賞を受賞している。長谷は無類の豆腐好きであったという。長谷は火野葦平（第六回芥川賞受賞）と親しかった。長谷

は芥川賞発表の一週間後に博多を訪れた。そのとき、原田種夫や矢野朗らが出迎え、歓迎会を開いた。だいぶ酒が回ったころ、長谷が正座して「厳肅な顔つき」で、

「正式に『九州文学』に入りたいが、入れてくれるかね」

と言った。原田は『実説火野葦平・九州文学とその周辺』（大樹書房、昭和三十六年）にそのおりの感動を「芥川賞をもらって脚光を浴びた長谷が、肩をそびやかすどころか、雑誌に入れてくれと頼むのである。その謙虚さがわたしたちの心をゆきぶった」と伝えている。火野は初めから「九州文学」の同人であり、ここには国民文学「無法松の一生」の作者岩下俊作も所属していた。

長谷は、昭和三十二年十二月二十日、タクシーにはねられ、翌日、帰らぬ人となった。翌年の一月十三日、若松の火野邸で恒例の新年会が開かれた。宴会が始まる前に、火野は「長谷の位牌の除幕式」だと言って、自ら

作った位牌を見せた。そこには火野が付けた長谷の戒名が記されていた。

「豆腐院此処何処白猿居士」。

長谷夫人から長谷が亡くなって「三十五日が近いのに、まだ戒名もない」ということを聞いて、火野が戒名を付けたのである。長谷は無類の豆腐好きであったので豆腐院、大酔すると「ここはどこ」と訊くので「此処何処」、小酔すると誰彼をつかまえて「やあ、しらばく」（しばらくの意）と連発するので「白猿」。後に本当の戒名も付いたから、長谷には二つの戒名がある、と、原田が書いている。

私は「九州文学」の発行人を務めた原田種夫と親しかった。息子の種真とも親しく交流し、種夫が他界したあと種真と協力して、種夫の日記を『九州文壇日記』と題して出版したりもした。私は生前の種夫からしばしば長谷健や火野の話を開かされていた。長谷健の本を手にするたびに、〈豆腐好きの長谷健〉ということを想起する。

万年筆に戻った

片岡義男
(作家)



下書きとまではいかない。メモとしか言いようがない。書いていく文章に必要なことや、論旨の展開など、とにかく書きとめておくに越したことのないものを、単語の羅列あるいはごく短い文章で個条書きしていく、という程度のメモだ。

仕事として僕が文章を書き始めたのは二十一歳からだ。それから十三、四年後には小説を書く人となった。ワープロに切り換えるまで、合計して三十年ほど、すべての原稿は原稿用紙に万年筆で手書きした。

ワープロを使うようになってから、まだ三十年はたっていない。二十五年くらいか。手書きしていた期間と合わせる、じつに五十五年近く、僕は文章を書いてきたことになる。そしてそ

のあいだずっと、文章のためのメモは、ボールペンで書いた。

アメリカの三穴バインダーがなぜか僕は好きで、サイズは何とおりかある。初めの頃はいちばん大きなのを使っていた。次第に小さくなり、もっとも小さいサイズをつい昨年までは使っていた。リフィルは百枚は入るから、その分厚さには安心感があった。右のページにだけ、一行おきに僕はボールペンでメモを書いた。

大きな字で自由に、ボールペンで僕はそのメモを書いた。ありとあらゆるボールペンを使った。数年前からは三菱のジェットストリームという替え芯を、パークーのジョウッターやカラシダッシュ、シェーファー、あるいはフィッシャーの廉価なボールペンに使えるよう、ごく簡単な細工をほどこして使ってきた。このジェットストリームの替え芯は素晴らしい。これでボールペンはひとまずの頂点をきわめたとまで僕は思った。

おそらくそのこととどこかで関係しているだろう、僕は万年筆でメモを書きたくなった。ボールペンよりも万年筆のほうが、僕が書くようなメモでは、自由度がはるかに高い、というこ

とも気づいた。万年筆探しが始まった。二〇一五年の春先から、カタログで選んでこれだと思うもののかたづけしから買って使ってみたおかげで、自分の書きかたや好みに適合する万年筆を、選び出すことが出来た。そしてインクと紙が問題になった。

万年筆で書くとき、紙と触れ合うペン先の突端のことを、ペンポイントと呼ぶ。このペンポイントとインクそして紙の、おたがいそれぞれの相性がほぼ一点で合致していないと、万年筆は書きにくい。いつでもどこでも購入出来るようなノートブックを何種類も買い込み、インクもおなじように何種類も買い、組み合わせを替えながら、ノートブックとインクをひとつずつ試していく、という作業が始まった。昨年の夏から秋にかけて、この作業のために、僕の机の周辺は、ノートブックとインクとで囲まれていた。

インクもノートブックも、選別の作業はまだ続いているけれど、ひとつの基準として選び出している

のは、パーカーのガラス瓶に入った万年筆用のインクだ。黒、ブルーブラック、そしてブルーの三種類が、簡単に手に入る。黒は使わない。だからブルーとブルーブラックだ。原稿を万年筆で手書きしていた頃には、パーカーのウォッシュャブル・ブルーというインクを使っていた。数年前に製造は中止となったが、在庫は探せばまだある。だから僕は探し、五十七ミリ・リットル入りの瓶を七つ、手に入れた。これを探す途中の手違いで、ブルーが十二個も、一度に手に入った。ブルーブラックはひと瓶しかないのです、いくつか買おう。

氣に言った万年筆三本に三種類のインク。これで充分だ。問題はノートブックだ。ペンポイントそしてインクとの相性は、かなりやっかいな問題だ。どのノートブックでもおなじじょう、書いていけばいいじゃないですか、という意見はあるだろうけれども、そうもいかない。

僕の気質としては、ノートブックは

一種類にしたい。万年筆はおなじメーカーのおなじシリーズから三本。インクはパーカーのブルー系の三種類。こうならべてみると、ノートブックの種類は増やしたくない。三種類のどのインクとも相性の良い紙を使ったノートブックを、見つけたい。いつでも、どこでも手に入るようなノートブックなら最高ののだが、万年筆用に特別な注意をはらって作られたノートブックがインタネット経由で買えるから、それにきめてもいい。

万年筆のために作られたインクは、ブルー系に限ってみても、世界じゅうに何種類あるかわからないほどに、数多く存在している。五百種類はあるような気がする。日本だけでも五十種類は簡単に揃うだろう。ノートブックもその種類は多い。どれかひとつにしたくて、いま慎重に選んでいるところだ。サイズはA4で、七ミリないしは八ミリの横罫だ。かならず見つかる、と僕は思っている。

異郷の人々



宮地智子

(詩人)

一三〇年前にカナダ生まれの英国聖公会宣教師のアレキサンダー・クロフト・シヨーが避暑地として国内外に紹介し、発展してきた長野県軽井沢という場所は、厳密に言うくと、現在旧軽井沢と呼ばれる限られた一帯を指しているが、その後次々と開発が進み、別荘地は広がっていく。

今から半世紀余り前、当時の信越本線軽井沢駅のひとつ先の駅であった香掛^{かか}駅が、中軽井沢駅と改名された頃、その中軽井沢駅から歩いて三十分程にある、小さな山小屋に、私は父に連れられて行った。小学校四年生頃のことである。

夏でも肌寒い高原の、鬱蒼と繁る針葉樹林の中にぼつんと建った六畳ひと間のその小屋には電気も水道もなく、父は近くの小川から水を汲み、外で薪を燃やして飯盒炊爨^{めづかん}をして子供たちに食べさせた。

東京の下町で関東大震災や第二次世界大戦の戦災によって焼け出された経験を持つ父は、いざという時の避難場

所としてこの小屋を建て子供たちには原始的な生活をさせたかったようだ。けれど、夏休みだけとはいえず、こんな生活は長くは続かず、そのうち電気や水道はおろか電話までも入った。けれど粗末なことには変わりなく、回りにぼつんぼつんと建っている立派な別荘と比べ、数段見劣りがして、子供ながらに恥ずかしかつたのを覚えてい

る。まだ小川で水汲みをしていた頃、それを見かけた初老のご婦人が、気の毒に思ったらしく、「家の水道を使っ下さい。」と親切にも声をかけて下さった。その初老の婦人は、『二十四の瞳』の作者である作家の壺井栄さんであった。瀬戸内海に浮かぶ小豆島出身のその作家は、夫である詩人、壺井繁治を東京の家に残し、避暑に来ていたのである。同じ瀬戸内海に浮かぶ島のひとつ因島出身の私の母とは同郷のよしみゆえか、よく立ち話をしたという。二人とも既に世を去って久しい。「主人は女中と二人で東京にいるん

です。」とも「子供のために私が働かなければならないんです。」とも洩らすことがあったと母から聞いたことがある。その壺井さんの別荘の二軒先のAさんのひとり娘のKちゃんは私と同じ年でもあり、いつしか行き来するようになった。ドイツ文学者であり大学教授の彼女のお父さんの夏休みを一緒に過ごすために東京から来ていたが、遊び相手もない退屈しのぎに、わが山小屋に足繁く遊びに来たのである。たったひと間の小さな山小屋が珍らしいのと、入れ代り立ち代り私の兄や姉がやってきたからであった。

Aさんのお隣は作家の中野重治の別荘であった。この二軒は家族ぐるみのお付き合いをしていた。あるとき、こんなエピソードを小耳に挟んだ。何人かで、浅間山の近くにある石尊山^{せきぐんざん}という低い山を登ったとき、中野さんだけ、疲れたのか、途中で下りたので、皆が残念がったところ、「今度登る時は、ここから登るよ。」と言い残してさっさと下りて行ったそうだ。

何というユーモア精神であろう。子供ながらに、文学者というものの偉大さを感じ取った瞬間であった。けれど長じて、私は中野重治の作品を愛することができなかつた。

誰の言葉だったか、へ愚かな人間は自分の経験に学び、賢い人間は歴史に学ぶ」という言葉がある。中野重治の作品は、前者の部類に属する、という私の見方は、ある小説を読み始めて間もなく受けた私の直感にすぎないかも知れない。けれど中野重治が晩年に書いたエッセイを読んで、私はある感動を覚えたのである。それは、戦後初めて天皇を見た中野が、天皇に対する感情が変化を見せ始めたことを告白しているのである。——ああ、この背中をこごめた哀れな老人を私は憎むことができない——という内容であった。

Kちゃんのお母さんの言葉を思い出すのである。「私はあの人は許せない。」と言う。あの人は、天皇のことなのである。戦争の責任者としてである。

この辺りの別荘の人たちにはどこか私の育った環境にはない、ある異和感がある、と私がうすうすと感じていた、その実体が、次第に明らかになってくるのである。

戦後十年経った頃、この辺りの大地主が、森林の一部を別荘地として、左翼系の学者や文学者に格安で分譲したのである。学者村と称して作られたこの一画には、元東京大学の総長の別荘もあった。

近衛兵として、天皇陛下の警護をした、という誇りを持っていた父は、昭和十五年一月には近衛混成旅団の一兵卒として南寧作戦に参戦している。その父は戦争の責任が天皇にある、など

と批難がましい心情を持つべくもなく、それは口に出さずとも、自然と、子供である私にも伝わっているのだと、私にはわかるのである。

時代が代わり、鬱蒼と繁る木々も、あちこち伐採され、山小屋風の斬新なデザインデザインの別荘が建ち並ぶ、おしゃべりなりゾート地として明かるく生まれ変わった。散歩をしていると、啄木鳥きつねに大きく穴を開けられた家があったり空の方まで伸びた木の幹を栗鼠リスが下りたり上ったりして、自然の逞しさに目を見張るのである。高原にはきつと、太古の昔から爽やかな風が吹いていたのだらう。

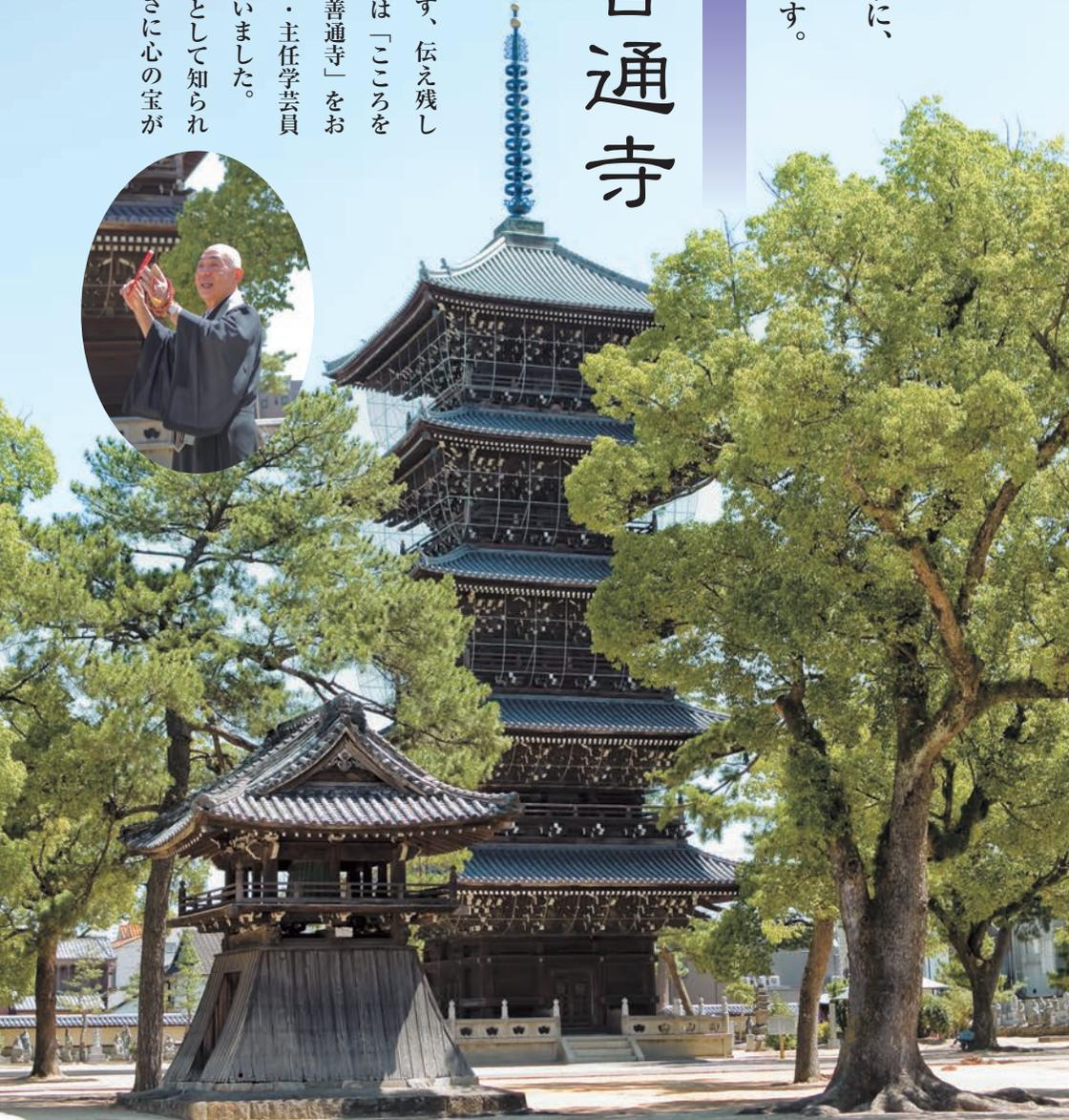


米を研いで
うまし酒を醸すように、
こころを磨く
名跡や風景があります。

こころを磨く

総本山 善通寺

「讃岐の美技」のみならず、伝え残した
たいふるさとの宝。今回は「こころを
磨く」と題して「総本山善通寺」をお
訪ねし、財務兼教学部長・主任学芸員
の坂田知應様にお話を伺いました。
弘法大師空海誕生の霊跡として知られ
る「総本山善通寺」。まさに心の宝が
ちりばめられています。





千年を超える 歴史の足跡

善通寺は、弘法大師空海が唐から帰ってきた翌年の807年から7年を掛けて、鎮護国家と救世利人の道場として建てたのが開基と伝われます。ところが、金堂のある伽藍の下からは、それよりもさらに古い白鳳期の瓦が出てきました。おそらく684年に起きた白鳳地震によって倒壊した佐伯家の菩提寺の瓦を、善通寺創建時に再利用したのではないかと推測されます。また、現在の金堂は江戸時代に建てられたものですが、その基壇側面には創建当時の礎石が使われています。お大師様が子どもの頃からあったといわれる大楠もそびえ、千数百年の時の流れを今に伝える東院(伽藍)です。





東院から進むと、西院の入り口となる「仁王門」。南北朝時代の銘がある金剛力士像がにらみをきかせている。

西院にあり、お大師様が唐に旅立つ前、水面に自らを映し、自像を書いて母に贈ったという伝説の池。



また東院には「法然上人逆修塔」もあり、まさに宗派を超えて参拝の方々が絶えません。

安置する「親鸞堂」、土真宗の開祖の自刻像を
 大師様です。境内には、浄
 りかけておられるのがお
 なさい」と宗教を超えて語
 きます。来世ではなく、「生
 きている間に幸せになり



2株の大楠は香川県天然記念物。お大師様の著書にある楠と伝えられ、寺伝では樹齢千数百年。



その昔は、お大師様の御影供前日の20日だけ通れたという名残の「廿日みえく(はつか)橋」。

宗教を超える霊跡 お大師様ご誕生の地

西院は「誕生院」と呼ばれるお大師様ご誕生の地。当寺は四国霊場第七十五番札所であり、多くのお遍路さんが訪れますが、実は大師信仰の信者の方々も相当数が来られています。現在は物質文明により、さまざまな弊害が生じて





弘法大師が誕生された佐伯家邸宅跡に建つ「御影堂」。

御影堂の内陣奥「奥殿」には、お大師様の自作と伝わるご本尊「瞬目大師像」が秘蔵されている。



善通寺のお守り地・水・火・風・空の五大の力と人が持っている内なる力が結びつき、諸願が成就するという「お守り」。方形の黄色は増益の色、円の白は息災の色、三角の赤は敬愛の色、半月の青は克服の色、宝珠の緑は知慧の色を表す。



お大師様と心のご縁を結ぶ

国家の安泰と衆生の幸せを常に願い続けたのがお大師様です。今もその祈りは「総本山善通寺」において、日々続けられています。その祈願の場でもある「御影堂」。その地下には「戒壇めぐり」の道場があり、闇の中を進むことで、自分を見つめ直し、新たに生まれ変わるという意味があります。奥殿真下では、再現されたお大師様のお声を聞くことができ、お大師様と結縁できる貴重な場所です。

破壊された。パルミラの遺跡



シリアの世界文化遺産パルミラの遺跡が空爆で破壊された報道はまだ皆様の記憶に新しいと思う。私は約二十年前に訪れた。翌年にシリアをテーマに展覧会をして、パルミラの遺跡の作品を出展した。

ローマ時代の都市の繁栄を物語る遺跡だ。凱旋門からローマ時代の列柱が立ち並び、背後の丘にアラブ人の城の廃墟が見える。夕陽に染まる遺跡は美しい。周辺にはナツメヤシが茂り砂漠のオアシスだ。世界で最も美しい遺跡の一つだ。

我々のツアーは遺跡に程近いホテルに泊まった。ちょうど私達が泊まった数日前にNHKがシルクロードの旅の取材で訪れていた。我々に日本茶でもてなしてくれた。その時にホテルのオーナーの息子がラクダ千頭に、金何キロと言ったのか忘れたが、三年契約で誰かお嫁にこないかというのだ、誰も立候補するものなし、さすがに砂漠の民の考えることは私達の想像を遥かに超えている。そんな平和な時代もあったのだ。

壊された遺跡は復元することは難しい。今となつては私の作品が当時を偲ばせる貴重な記録となった。

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター)
イラストレーター

作品制作という特殊な行為



志村榮至しむらむらよし のり

(栄守改め)
(評論家)

七歳児の奇跡の生還は、国中に大きな感動をもたらした。しかし、それは同時に、羨うらやまとか家族という人間関係へと目を配するきっかけを頂戴ちやうたいした、と思えなくもない。

唐突だが、私事に走ると、己れの幼児、子供時代の変則性がつい浮上する。祖母の影響は覚えがあるが、父親、母親からはほとんど何も言われることなく成長してしまった。

このことと関連することは確かと言えそうで、十代から小林秀雄に関心があった。一体、何を考えたのだろうか、と。しかし、当然のこと、最初は錯誤さくごと苦悶くもんの混在したような、進歩は遅々とした日々だった。

「苦しげに結んだ口、顔立ちのどこ

を取ってみても振むれ、引きつり、窶やうれていた。人間の面上に、これほど積り積った苦悩の表情が現れてゐるのを僕は見た事がない。」

これは、小林が『ドストエフスキイの生活』で引用する、当時、ペテルブルグのフランス外交団の一員であったヴォギユエという人が書き残した、先人の面貌めいぼうの鮮烈な印象だ。

文豪として後世に名を残す人でも、人生の謎に直面すると、第三者の目にはこのように映った時があったということまで借りた。考えるという人間行為は、平易と判断され易いが、真実は天国と地獄のボーダーを小迷うことに譬たとえてもいほどの危険性を秘める。

それは脇に置くが、月日の経過は、

ベルクソンを筆頭にアランとかヴァレリイ等々の名が挙げられるフランス系の慧智えいちと、ロシヤのドストエフスキイの思想を、小林を流れる二大潮流として認識する、狹隘きやくがいでマニアックな小林秀雄敬愛者を作り上げていた。

これは後に、古雑誌を見直している時だったが、群司勝義という人が、その片一方を裏付けていることを知った。小林の単行本に付した『あとがき』で、『ソヴェットの旅』にはこのようにあると。

「私（＝小林）は、文学者になるについで、ロシヤの十九世紀文学に、非常に世話になった。ドストエフスキイといふ作家を読んで、私は、文学に関して開眼かいがんしたのです。」

「開眼」とは、誰がどう読んでも、大変なことだ。もちろん、『Xへの手紙』とか『断想』という、比較的、看過され易い作品で、はからずも目にするあの逆説が必然的に身近かに来る。すると、亜流ありゅうの下世話な憶測は走り出す。あの小林も、若い頃の生きる日々

の各シーンで、あの逆説を信条として自らにいい聞かせつつ成長を遂げ、後の大業を成し遂げたのだろうか、と。

と同時に、一方のベルクソンからは、『ナンセンス文学』という軽いタイトルを冠した作品で、この先人の全思想を、「ひと掴み」(＝小林がよく使う表現)にしたかのような、あの文盲が目の前に来る。

しかし、歩みを止めないのは小林と同じだ。最晩年に至って、自国の先人、本居宣長に関する大部の論述を残した。初版の一冊を即、購入したが、大作の例に漏れず言及が微細で閉口してしまった。

ところが後年、これも古雑誌を整理していた時だ、小林が某氏との対談で、話し言葉ゆえか、平易な表現で、宣長の人間性が私達のごく身近かにあることを開示しているところに遭遇した。小林が、生きる知恵をどれほど残してくれたか、この時も敬愛は倍加した。

「そうですよ、思い出すんですよ。思い出すことは想像でしょう。」

「だけどじかに私生活を問題にしないと、人間の中から健全なものが、みんななくなってしまう。」

「自分と古人との間に親しい関係を結び、この関係を情理をつくして明瞭化する。これが宣長の古学です。」

問題は以下で、逆説の気配が際立つ。

「彼(宣長)はものの道理が通ることとを、非常に憎んだんです(中略)道理を通そうとすると、ものが歴史に触れない。歴史に触れないことは、人間の生身に触れないことでしょ。」

「道理が通ること」を仇敵視したかのようなここに、この思想の素面が露だ。(もちろん、この先の先に思想のテリトリイはある)。

それはここでは素通りして、「人間の生身」に拘泥すると、ロシヤの先人の異様な風体が気に掛る。マックスの許しを乞いつつ、こんな空想へとつい走ってしまう。

先人は晩年に至って、自身の苦汁ま

みれの人生(＝小林の著作から、そのように判断してしまふ)の謎を、自らの内面に生棲していた父親への憎悪、そのあまりに激しい情念の仕業であったか、と察知したのだと。そこへ到達するまでの精神の地獄のワンシーンを、あの西欧人に見られてしまったのではないか。

しかし、先人のその苦悩は、結果的に小林に「開眼した」とまで書かした、あの逆説を生み出す母体の役割を果たした、との一種のドラマがここに想定されて、感興は募る。

さらに、『カラマアゾフの兄弟』の主人公の憎悪と嫌忌の告白は、己れの実人生の謎の解明に長期間を要した作者自身へ向けての怒りでもあり、不運との訣別を企図したものであったのかと、想像は妄想へと暴走する。

なお、小林は或る著作でこう書いている。「若し作品制作といふ特殊な行為によって、己れの信念の育つのを自ら覚えなかつたならば、彼は作家と言へなかつたであらう。」

近況報告

山西無聞



三年ごとに開催されている高校の同窓会の案内が来た。

出席欄に○印をして、近況・メッセージ欄に「毎日忙しい日々を送っています」と記載した。しかしこれだけでは本当は忙しくないのに見栄を張っ

ていると思われなかいかと思い、いかに忙しいか具体的に書くことにした。

「毎日忙しい日々を送っています。どのように忙しいか昨日の一日の行動を紹介します。まず妻の小言（小言の理由は、この文を最後まで読まれた方

は（もしおれば）分かります）を聞きながら五時半に起床。洗顔歯磨きをして今日一日の予定を考えながら散歩。

帰宅してテレビ体操を見る（見るだけで健康的な気分になれる）。次いでテレビを見ながら朝食、そして食器洗

い。新聞を読み、サンプルをしていると昼食となる。妻とスーパーへ買い物に行く。今日は珍しく「なんでも好きなものを買え」と言うので濃蜜二度かけカリントウを手にとると「糖分が多いからダメ」と言う。更に「塩分・脂肪・コレステロールの多い物もダメ。見るだけ」と言う。熟慮のすえ、もめん豆腐とおかめ納豆を取ると、妻は笑みを浮かべて満足した顔をした。帰宅して一時間の昼寝（いつも目覚めがボーとしているのは、就寝中も忙しく脳みそを酷使しているからだと思う）。パソコンのフリーセルをしていると早くも夕方になったので入浴し、テレビを見ながら飲酒と夕食をこなす。しばらく妻とテレビを見ていると、多忙だった今日一日の疲労がどつと押し寄せてくるので、九時にはベッドに入り、録画を見ながら翌日に疲れを残さないように熟睡をしなければならぬ（妻の小言の理由はテレビを付ければなしにして寝たことによる）。このようにやらなければならないこと

がぎっしりと詰まっついて、一度に二つ三つのノルマをこなすことも多く、土日も祝日も関係なく多忙で、月々水木金の毎日でゆっくりにする暇もありません」

以上の文章ができたのでパソコンから印刷し、初めに書いた「毎日忙しい日々を送っています」の文字の上から貼り付けようとしたが、文章が長くてとてもハガキに収まらない。文字を八ポイントにしても収まらない。八ポイントより小さい文字が私のパソコンにないので縮小コピーをしたが、黒いポイントが並んでいるように拡大鏡がなければ全く読めない。「拡大鏡で読んでもださい」と注書を入れることも考えたが、「拡大鏡を買ってきて読んだがツマランかった。弁償せよ」と追及される恐れがある。そこで、文章の中の必要な箇所を削除することにした。ところが、もともと些細な行動は省略しながら作成したのだから、読み返してみてもどの箇所も必用に思えて削除するところがない。

ここで省略した行動を紹介すると、例えば、数回のトイレと欠伸。そしてクシャミ（私は花粉症なので、「クシャミをする」と数十回も書かなければならなくなる）

また、二階が上がって何のために上がったのかと戸惑うことが一日に数回ある。時には、足の運動のために二階に上がったのに、二階にいる理由を思い出そうと苦悩することもある。

さらに省略した内容を補足すると「テレビ体操を見るだけで健康的な気分になる」理由については、詳細に書けば、私の人格を誤解される恐れがあるのでカットした。

「朝食後の食器洗い」の時間は、自分のことよりも私の健康の方が大切と考えて、常に助言と指導を怠らない妻から解放される至福のひと時である。ただ週に一二回しか命じられないのが残念である。

「夕食後のテレビ」はバラエティ番組を見る。見ても出演者だけが楽しんでいるように思えて全く面白くない

大型クレーン船

佐川 毅彦



子供の頃からよく知っている宏治は建設会社の役員をしている。彼から会社のクレーン船に魚の絵を描いてくれと頼まれた。かなり大きな絵になる。まず、原画を描いて見せる事になった。一週間後に自信作をもっていった。

役員会で検討して近日中に連絡するという。

その間に、私一人のできる仕事ではないので、友人に手伝ってもらおう了解を得る。ところが三週間過ぎてても返事がない。

その後、模合の月一回の飲み会で何度か宏治と会ったが、そのたびに今検討中というだけである。

あれから三年が経過した今、いつもの飲み会で宏治が完全に諦めていた私に船の絵の話を持ち出したのである。クレーン船は作業を休んで糸満の港に来月七月末まで停泊している。その間に絵を描いて欲しいので、まず船を見にいった見積書を出してくれという。この前提出した絵は使うのかと聞くと、まだ決まっていないという。あの時制作メンバーとして頼んだ看板屋の知念と、塗装業の守と

三人で宏治の車で港に向かった。東洋一といわれる大型クレーン船を見た時、もしかしたら、反対されている辺野古の工事もやるのだろうかと思ったが、口には出さなかった。

船の絵を描くスペースを測ってみたが、聞かされていた寸法が違っていた。最初描いた絵は描き直さなければならぬようである。

十日後、見積書と描き直した絵と、さらに一枚傑作を描いて、社に届けた。見積書の金額を見た宏治は高いといいい、役員会で検討するから返事は一週間まってくれという。

しかし一週間過ぎてても連絡はなかった。彼に飲み会で会ったら、会長が絵が気に入らないようでウンと言わないといいい、どうするか。又しても、検討中ときた。さらにもう一枚タッチを変えて、迫力のある力作をもって、最後の挑戦をするか。

私も検討中である。